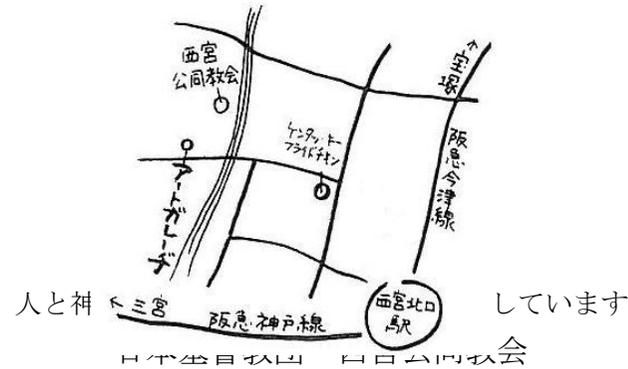


週報

「信じます。

不信仰なわたしを、
お助けください」。

(マルコによる福音書第9章24節)



〒662-0834

兵庫県西宮市南昭和町 10-22

TEL 0798-67-4691

FAX 0798-63-4044

郵便振替 01170-3-4901

ホームページアドレス

<http://www.koudou.jp/>

電子メールアドレス

koudou@gamma.ocn.ne.jp

小さな手大きな手

(前週よりのつづき)

その「日本語訳への序文」は、以下のように始まっています。

「…本来の主要なメッセージの一つは、明確な始まりと終わりというものは、私たちがいくらそれを望もうとも、核事故にはないということです。核事故が起きると、人々は地域を閉ざし、放射性降下物や黒鉛の燃焼・溶融した原子炉からの廃棄物を封じ込め、冷却し、貯蔵するための容器やポンプ、配管を製造します。たとえば、閉鎖された福島第一原子力発電所では、目を見張るほど高い放射能のエネルギーを持つ泥状の放射性廃棄物を、特別に設計された(HIC と呼ばれる)ポリエチレン製のタンクに貯蔵しています。しかし、人がどれだけ管理しようとしても、放射性同位体は独自の環境を作り出します。そして、それらをどこか安全な場所に保管するために人が慎重に設計したシステムを壊してしまいます。このため、事故は継続するのです。作業員は閉鎖された発電所に戻り、詰まったパイプを洗浄し、腐食したタンクを修理し、破損したパイプを繋ぎ直します。その過程で、パイプが破裂し、液体が噴出し、ガスが発生し、漏れ出た放射性汚染物質が皮膚に付着し、鼻腔内に入り込み、さらに肺や血液細胞、その他の臓器に到達します。時には、福島第一原子力発電所から太平洋に放出されるトリチウムで汚染された廃水の放出のように、より大規模で意図的な漏出もあります。まるで繁殖するかのように、ひとつの事故が別の事故を生み出し、それがまた第3の事故を生み出す。核事故は無限に続いていくのです」

・11月30日 「地元定着、成果見えず／『霞が関状態』」

・12月5日 「3号機ドローン調査、延期、第一原発、貫通部内装置進まず」

・12月16日 「汚泥処理開始また2年遅れ、福島第

一原発耐震設計に時間」

・12月17日 「ドローン調査、年内断念、第一原発3号機、工程改めて精査」

・12月26日 「除染土の再利用事業視察、飯舘で石原環境相」「第一原発3号機ドローン調査延期問題、配管つなぎ目段差妨げか」「2号機デブリ取り出し、今年度中ロボットアーム原発内に運び込み」

・12月31日 「除染土花博で活用検討、2027年政府、安全性、理解醸成へ」

・1月3日 「震災・原発事故15年、双葉町、1号機水素爆発から1週間後、役場機能ごと埼玉へ」

・1月16日 「第一原発、2号機使用済み燃料取り出し、設備試運転を公開」

・1月20日 「第一原発1号機原子炉建屋、大型カバー設置完了」

1月18日の週報・小さな手大きな手では「 」の恐怖と…カッコ内が空白になっていました。入る予定になっていたのは、「チェルノブイリの遺産」(ジョレス・メドヴェージェフ、みすず書房)でした。発行は1990年、みすず書房の日本語版は1992年です。これは、今日に到るまで「正確にあのとき何が、なぜ起こったのか、そのすべてを語るレポート」で、東電福島の事故を見る場合は、必要な指摘がなされています。

たとえば、東電福島の事故からやがて15年、「廃炉」と言われている事故対策は、遅々として進んでいません。12月5日、12月17日、12月26日と、繰り返して報道される、3号機のドローン調査の延期は、そもそも、事故から15年近く経って、なぜ「ドローン調査」なのか、それを妨げているのは「…ドローン調査延期問題、配管つなぎ目段差妨げか」などと言われています。

で、調査は「なぜドローン」なのか。

(次週につづく)